

第1回 NIE「わたしの推し記事」コンクール 中学校 最優秀賞

藤原 菜都乃（西宮市立浜脇中学校2年）
私の推しは、「シジュウカラ」です！

選んだ記事：日本経済新聞 2022年6月30日付

見出し：鳴き声は文章「鳥語」発見◇シジュウカラを観察、単語や文法を世界で初めて証明◇鈴木俊貴

①この記事を選んだ理由と考えたことを書いてください。

鳥語の発見は世の中の考え方を大きく変える可能性がある。人間だけが言葉を話すという考えは、他の動物より人間が優れているという考えにつながり、人間中心の社会形成の後押しをしてきた。しかし、鳥語の発見はこうした社会に疑問を投げかける。地球の小さな生き物の尊厳があることを私達人間に強く訴えている。

②あなたの「推し」について、ファンをもっと増やすためにはどのようにしたら良いでしょうか？宣伝方法やアイデアなどを具体的に（誰に、どんな風に、どうしたらいいかなどを）書いてください。

私はこの研究を生かして鳥とコミュニケーションをとってみたいことを提案する。普段の生活で人間と野鳥とのかかわりはあまりない。そこで、この研究で分かっている文章や単語の音声を流して、実際にコミュニケーションをとってみたいだろう。機械の名前は犬の「バウリング」ならぬ「トリリング」。これに、鳥が反応することでコミュニケーションがとれたらとても面白いと思う。例えば「集まれ」という意味の「チチチチ」を流して集まってくる様子を観察したり、聞こえてくるシジュウカラの声を翻訳することができたら推しはきっと増えると思う。そして地球に生きる小さな生き物に対する敬意や環境への配慮がもっとうまれるのではと考える。

文化

シジュウカラといふ小型の鳥に言葉があることを世界で初めて証明した。実はこれまで猛禽の言葉類も含めて、人間以外に言葉の存在が証明された例はない。梶井沢の森で1年の半分以上を過ごし粘り強く観察を続けた僕の論文は、たちまち世界の注目を集めた。

きっかけは生物学を専攻していた大学時代。シジュウカラが明らかに他の鳥より鳴き声の種類が多いと気づいた。しかも状況に応じて使い分けている。動物学や言語学で人間以外は「怖い」「好き」などの感情のみ伝えていて、単語や文法は持たないと考えられてきた。興味をそそられ「鳥語」を研究すると決めた。

まず取り組んだのが単語の証明だ。「ジャージャー」。へびが巣に襲いかかると親鳥が聞いたことのない鳴き声をあげて警戒していた。「へび」という単語になっているのでは？ 証明方法は確立しておらず、手探りで進めるしかなかった。100個近い種類を



「ジャージャー(へびだ!)」という鳴き声を聞いて、地面を探すシジュウカラ

鳴き声は文章「鳥語」発見

◇シジュウカラを観察、単語や文法を世界で初めて証明◇ 鈴木 俊貴



取り付け、へびの刺製を使って実験すると結果は思った通りだった。

とはいえ「怖い」などの感情を表しているだけの可能性もある。そこで別の天敵の刺製を見せるべく、タカなら「ヒヒ」と鳴くなど使い分けしていることがわかった。「ジャージャー」と聞くご地面を茂みなどへびがいない場所をひとつ見ると、一方「ヒヒ」なら驚いたり逃げたり、上空を見上げたりする。

果たしてこの観察だけで言葉を持つといえるのだろうか。この度についてひらめいた。「音階違い」を利用しよう。

心算写真を使い浮かべてほしい。白いモヤを顔だよ」と見せられると顔に見える。それは人間が「顔」という単語から顔

の画像をイメージするからだ。鳥が単語を理解するなら「ジャージャー」と聞いたときに音階なら間違わないものを多くと間違いないはず。

用意したのは木の枝だ。紐を使ってへびのよこに動かした。同時にスピーカーから「ジャージャー」と聞かせる。鳥たちはまるでへびを見つけたかのように近づいた。鳴き声ではそこならぬ。これを決め手に論文にしたのが2018年。鳥は驚くと一回しかだまされなければ、これまで10年かかった。

次に証明したのが文章だ。語順を入れ替える実験で、文法があることが明らかになった。天敵のモヤが現れると「ピーツヒ(警戒した)・ブブブ(集まれ)」と声を出し、集まってモヤを威嚇する。ところが語順を逆にすると「ブブブ・ピーツヒ」と合致した声を聞かせても反応しない。

こんなふうに証明方法を編みだし15年以上観察を続け、コツコツと明らかにしてきた。他にも「ツピー」「チツチツ」などは20以上の単語を使い分け、200種類以上の文章を作っていると考えられる。毎年発見の連続で、研究のネタはつきない。

研究を通じて見えてくるのは、人間が特権的存在ではないということ。鳥かな言葉の広がりを知れば、世界の見方が

変わるに違いない。8月に動物学で最も権威のあるスウェーデンの国際学会で基調講演するが「動物言語学」という新たな学問分野を提案したい。

小さい頃からカエルやヒメを捕まえるのが好きで、東京都から茨城県に引っ越すと、ますます虫や鳥が身近になった。自然好きが僕のために引越したらしい。父は時間かけて東京に通勤し、カエルが昔手だった母も嫌な顔せず飼わせてくれた。好きな研究でワクワクした日々を過ごしているのは、両親のおかげでもある。(まぐき・としが「京都大学目黒センター 特定助教」)